

中国南京市居住大学生の観光行動に関する地理学的分析

Geographical Analysis on the University Students' Tourism Behavior in Nanjing, China

杜 国慶* 溝尾良隆** 張 京祥***
Guoqing DU Yoshitaka MIZOO Jingxiang ZHANG

Abstract : With the promoting of Reform and Open Policy in China, economic development in the eastern coast areas such as Shanghai and Nanjing is remarkable now. Diversification of tourism especially the spatial difference has been generated as a result of popularization of tourism. This research is aimed to investigate the spatial characteristics of tourism in China by analyzing the university students' tourism behavior in Nanjing. In our analysis, the patterns, periods, areas and spatial characteristics of tourism behavior were clarified based on a questionnaire survey. The university students' tourism behavior can be classified with the attributes of tourism purposes, destinations and contents into three patterns : independent pattern, homecoming pattern, and study field specified pattern. Each pattern shows different spatial structure.

Keywords : 大学生 (university student)、空間構造 (spatial structure)、観光圏 (tourism area)、南京 (Nanjing)

第二次世界大戦後、日本をはじめとする先進工業国においては、高度経済成長に伴い、可処分所得の上昇、自動車社会の進展、高速交通網の整備、さらには労働時間の短縮や情報産業の発展により、観光行動の多様化と観光関連産業の拡大が促進された。

国民生活に定着してきた観光・余暇活動は、生活行動の重要な一環であり、生活行動の空間パターンを地理学的において重要な構成要素になっているともいえる(高橋、1990)。日本の観光地理学において、従来の研究では、観光地の形成過程や形態の分類、あるいは観光地化に伴う地域の変容など観光行動の行われる空間を対象とするものが多い。一方、観光地を形成するプロセスでもあ

り、なおかつ人間の生活行動の一形態である観光行動に重点をおいた研究は比較的少ない。観光行動に関する研究は、都市住民の観光行動形態と観光地機能・分布について論じた研究(小池、1960)や居住地と職業の差異による余暇行動圏の構造を分析した研究(高橋・高林、1978)、都市機能への近接性による余暇圏の構造を考察した一連の研究(落合、1987、1991、1993、1999)、そして女性による観光行動の空間構造と特性を論じた研究(若生ほか、2001)がある。外国において、観光地理学の研究も日本と同じく観光地域の形成が主体であり、観光者の行動に関する分析(Burneet、1976; Louviere、1981)は、極めて少ない。

* 立教大学観光学部講師

** 立教大学観光学部教授

*** 南京大学城市資源学系助教

一方、中国では、1976年までの毛沢東時代には、経済発展の遅れと厳しい政治規制により、国内における人口の地域的移動は出張と帰省に限られ、一般国民においては、レクリエーションとしての観光は非常に少なかった。1978年に改革開放政策が推進され、現在、上海・南京等の東部沿海地域を筆頭にして、経済発展が著しい。1978年と比べると、1999年、農村部一人当たり平均収入指数が4.38倍、都市部一人当たり平均収入指数が3.61倍に上昇した。経済成長に伴い、国民の生活行動も大きく変容しつつあり、なかんずく、可処分所得の上昇により、観光行動の一般大衆化が進行している。このような変化は、統計にも反映されている。1994年の一人当たり国内観光支出金額は195元であったが、わずか6年後の2000年には、427元まで増加した(湯・潘、2002)。

こうした観光行動の一般大衆化に伴い、観光行動の多様化、とくにその空間的な差異が発生しているものと推測できる。国民の観光活動に関する研究も展開されてきた。観光地における観光客の時間的および空間的な分布に関する研究もあった(張ほか、1999a；張ほか、1999b)。特に、都市住民の観光行動が注目されている。呉ほか(1997)は、上海、西安、成都、長春の4都市を対象として、一般市民の観光目的地の選択について調査し、80%の目的は居住地から500km圏内に分布し、都市観光が圧倒的に多く存在すると指摘した。李ほか(2001)は計量的な手法を用いて、上海市民の観光目的地を考察した。米ほか(2001)は、都市住民の観光行動に重要な位置を占める日帰り観光に関する実証研究を踏まえて、モデルを構築した。蒙(2001)は、中国の青少年観光市場について、観光ネットワークの重要性について論じた。ただし、中国における観光行動に見られる空間的特性はこれまで十分に解明されているとは言えない。

1. 研究の目的と方法

本研究は、南京市における大学生の観光行動を分析することにより、中国における観光行動の地域的な特性を解明することを目的にする。分析では、アンケート調査に基づいて、観光行動の類型、

観光時期による観光圏の形状および観光行動の空間的特性を明らかにした。ただし、本研究の対象者の属性を大学生としたため、一般的な国民の観光行動を直接論ずることは困難であるが、分析結果の予察から中国における観光行動の一般的特性を議論したい。

本研究の対象地域の南京は江蘇省の省都であり、かつては金陵と称されていた。山に囲まれ、長江が市内を貫いて流れる地形の極めて険しい長江下流に位置する。気候は湿潤である。前後して10の王朝が都をここに置いていた。面積は6500km²で、人口は506万人。中国の最大の都市上海まで鉄道距離で305kmである。南京以東の長江三角洲には、揚州、鎮江、無錫、蘇州、南通、上海、杭州など数多く山水文化と地方風情に富んだ名高い観光地が立地する。

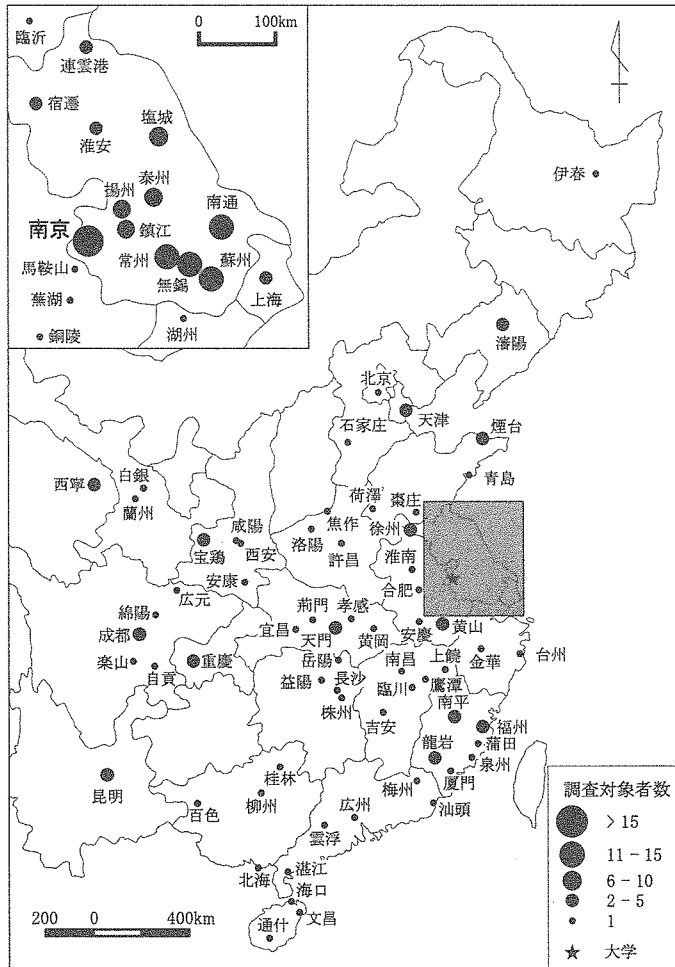
2001年11月5、6、7日に、南京大学において大学生を対象としてアンケート調査を行った。277部のアンケートを配布した結果、回収部数が259で、有効回答が237部で、有効回答率が85.6%であった。本アンケート調査は、国内日帰り観光と国内宿泊観光、海外観光と3つの内容から構成され、回答者の過去1年間(2000年10月～2001年9月)に実施したすべての観光行動を月単位で調べたものである。回答者237人において、国内宿泊観光が合計937件、国内日帰り観光が475件、海外観光が4件である。現在中国の大学生において、海外観光がまだ普及していないとも言える。したがって、今回の分析は、国内日帰り観光と国内宿泊観光を中心とし、特別でない限り、「宿泊観光」と「日帰り観光」はすべて中国国内のものとする。

分析の結果により、大学生の帰省観光を規定する実家の所在地と、大学での専攻に応じた地理・地質・大気科学など野外実習が、中国における大学生の観光行動に大きく影響を与えることを予想した。このため、アンケートの配布する際、大学生の専攻および実家の所在地に偏りが生じないように配慮した。237名の回答者の中、地理・地質・大気科学の学生が159名で、67.1%の最も高い割合を占めるが、回答者の専攻は、文科系と理科系の幅広い多分野を及ぶ。

次に、回答者の実家の所在地を省・直轄市・自治区レベルで集計した。南京大学は中国の全国的な重点大学であるため、国家教育委員会の規定により、全国各省・直轄市・自治区からの学生募集人数には、適切な構成をとるように上限が定まっている。他方、大学所在地の江蘇省との間には、江蘇省出身者が半数以上を占める合議もある。以上の実情は、今回のアンケート調査にも反映されている。中国の34の省レベル行政単位のうち、25の省・直轄市・自治区からの回答者があった。その内訳は、江蘇省出身が128名で過半数(54.0%)を占める。次いで、中部と南部の福建省(9人)と安徽省(8人)、湖北省(8人)などが

らの回答者が多い。

回答者の実家所在地の空間的分布(第1図)を考察してみると、南京が27であり、8以上の値をもつ都市は南通(15)、常州(14)、蘇州(14)、無錫(12)、塩城(9)、泰州(9)、鎮江(8)、揚州(8)であり、すべて江蘇省に属し、南京からおおよそ400km圏内に立地する都市である。残りの都市は全て4以下の低い値をもつが、図示のように、北は黒龍江省の伊春市(1)、南は海南省の通什市(1)、西は雲南省の昆明(2)まで、回答者の実家所在地は86都市に分布しており、ほぼ中国全土を覆っている。



第1図 調査対象者の実家の所在地分布図(2000~01年)
(アンケート調査により作成)

2. 観光目的による類型化と観光内容

本章は、観光の目的から大学生観光行動を類型化したうえで、各種の観光の特性を探る。

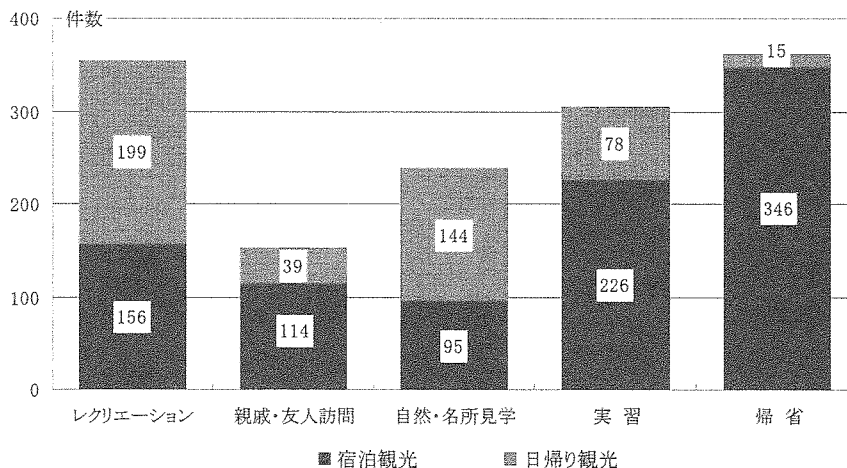
大学生の観光において、様々な目的が存在する。ここでは、観光の主要な目的をレクリエーション、親戚・友人訪問、自然・名所見学、実習、帰省に分けて、大学生の観光行動を考察する（第2図）。

まず、大学生の観光行動の件数を考察すると、件数が最も多いのは、帰省に伴う観光の361件で、そのつぎはレクリエーションに伴う観光の355件と実習の304件である。したがって、大学生の観光行動において、余暇活動として行う自主的な観光のほか、帰省そして学習の一環とする野外実習に伴う観光行動を無視することができない。それは大学生の生活パターンに原因が存在し、大学生が一般市民と区別される特徴であるとも言える。ただし、帰省観光には、大学から実家への近接性が観光行動の頻度および時期を決定する。例えば、実家が南京市あるいはその近隣都市にある場合、週末そして連休を利用して帰省することが可能であるが、実家が遠方である場合、交通の利便性がまだ良くないうえ航空運賃の高い中国においては、夏休みと冬休みが利用されることが一般的であり、このため、年に1回か2回しか帰省しない学生も多くいる。しかし、このような状況

にも関わらず、大学生の帰省件数が最も多いことから、中国の大学生観光行動では、帰省の際に親族・友人訪問が主要な目的となっており、親族・友人との関係に大きく影響されると言えよう。実習に関しては、専攻が最重要な要因になると考えられる。加えて、今回のアンケートでは地理学を専攻とする学生からの回答が多いため、実習を中心とする実習・研究とともなう観光も重要な位置を占めると考えられる。

ついで、宿泊観光と日帰り観光の割合からみると、親戚・友人訪問、実習、帰省においては、宿泊観光が圧倒的に多い。この現象には共通する原因が存在する。親戚・友人訪問と帰省の場合、友人または親族の宅を無料で利用できるため、宿泊を伴う観光行動を促進している。実習においては、大学から宿泊と交通の助成金が支払われるため、宿泊も可能になる。しかし、レクリエーションと自然・名所見学に関しては、すべての費用が自己負担になるため、日帰り観光が多い傾向を示す。

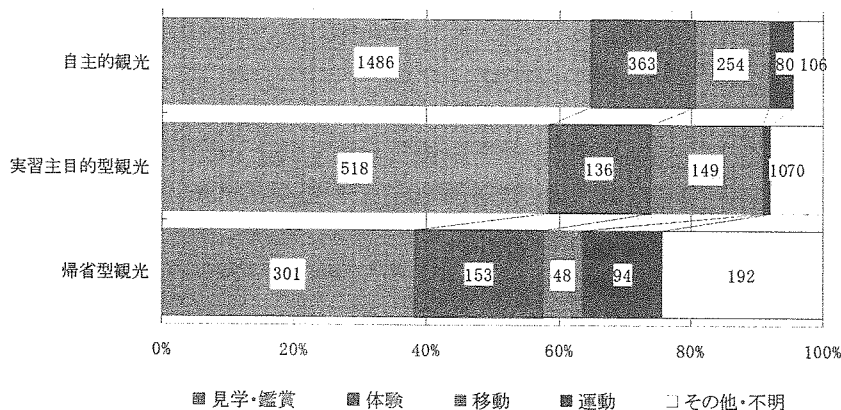
上述の観光目的および構成を分析した結果として、大学生の観光行動の意思決定には、主に以下の3つの要因が存在すると考えられる。まず、実家の所在地と親族との関係から、大学生の帰省行動とそれにとともなう観光がなされる。ついで、野外実習に関しては、目的地と交通手段、実施日数はすべて大学側が決定するが、大学生はある程度



第2図 目的別観光件数 (2000～01年)
(アンケート調査により作成。数字は件数を表す)

の自由時間が与えられ、目的地もほぼ自然環境が優れる名勝地が多いため、それに伴う観光行動も十分行われている。第三に、残りのレクリエーション、親戚・友人訪問と自然・名所見学は、上記

の2つの観光とは違い、大学生自身がそれぞれの趣味と嗜好を反映した結果である。したがって、以上の3要因に基づき、大学生の観光行動を帰省型観光、実習主目的型観光と自主的観光に分類す



第3図 類型別観光活動内容の構成 (2001年)
(アンケートにより作成。図中の数字は活動件数を示す)

第1表 類型別観光の活動内容の構成 (2000～01年)

内 容		自主的観光	帰省型観光	実習主目的型観光
見物・鑑賞	1. 季節の風景を見る	149 (6.5)	31 (3.9)	40 (4.5)
	2. 自然の風景を見る	414 (18.1)	87 (11.0)	193 (21.9)
	3. 名所・旧跡を訪れる	382 (16.7)	27 (3.4)	133 (15.1)
	4. 神仏詣	83 (3.6)	13 (1.6)	32 (3.6)
	5. 都会見物	260 (11.4)	107 (13.6)	76 (8.6)
	6. 演劇・音楽・スポーツなどの鑑賞	47 (2.1)	17 (2.2)	2 (0.2)
	7. 動・植物園, 水族館, 博物館, 美術館見物	130 (5.7)	15 (1.9)	38 (4.3)
	8. 博覧会	21 (0.9)	4 (0.5)	4 (0.5)
小 計	1486 (64.9)	301 (38.2)	518 (58.7)	
体 験	9. 遊園地	64 (2.8)	21 (2.7)	3 (0.3)
	10. 釣り	3 (0.1)	15 (1.9)	1 (0.1)
	11. 潮干狩り, 果物狩りなど	10 (0.4)	10 (1.3)	3 (0.3)
	12. 写生・写真, 動・植物採集などの趣味・研究	79 (3.5)	7 (0.9)	83 (9.4)
	13. 飲食	196 (8.6)	95 (12.1)	42 (4.8)
	14. 民芸品造り	11 (0.5)	5 (0.6)	4 (0.5)
小 計	363 (15.9)	153 (19.4)	136 (15.4)	
移 動	15. 登山・ハイキング	180 (7.9)	20 (2.5)	138 (15.6)
	16. ピクニック	44 (1.9)	9 (1.1)	8 (0.9)
	17. キャンプ	16 (0.7)	1 (0.1)	2 (0.2)
	18. ドライブ	14 (0.6)	18 (2.3)	1 (0.1)
小 計	254 (11.1)	48 (6.1)	149 (16.9)	
運 動	19. 海水浴	6 (0.3)	5 (0.6)	0 (0.0)
	20. 水泳(湖・プール)	14 (0.6)	24 (3.0)	3 (0.3)
	21. ヨット・モーターボート・ダイビング・サーフィン	14 (0.6)	1 (0.1)	3 (0.3)
	22. スキー	1 (0.0)	2 (0.3)	0 (0.0)
	23. アイススケート	13 (0.6)	16 (2.0)	1 (0.1)
	24. ゴルフ	3 (0.1)	2 (0.3)	1 (0.1)
	25. テニス	6 (0.3)	1 (0.1)	0 (0.0)
26. その他のスポーツ	23 (1.0)	43 (5.5)	2 (0.1)	
小 計	80 (3.5)	94 (11.9)	10 (1.1)	
その他・不明	106 (4.6)	192 (24.4)	70 (7.9)	
合 計	2289 (100.0)	788 (100.0)	883 (100.0)	

注：括弧のうちの数字が割合 (%) を示す。

(アンケート調査により作成)

ることが可能になる。1412件の観光のうち、帰省型観光が361件、実習主目的型観光が304件、自主的観光が747件の構成である。

帰省型観光と実習主目的観光は、いずれも明確な目的が確定されているが、自主的観光に関しては、多目的性を示す。ここでは、観光の内容から、各類型の特徴と差異を考察する。

まず、既述の3類型ごとに示したものが第3図であり、まず活動内容を大きく見学・鑑賞、体験、移動、運動、その他の5種類に分け、各類型の特徴を考察する。類型別の活動内容構成を示すのは、割合をみてみると、とくに実習主目的型観光が自主的観光と類似した構成を示すことから、実習主目的型観光においても、大学生が学習のほか、観光活動を行うことが分かった。それは、実習旅行も大学生の観光活動の一類型として区分される重要性を示しているとも言えよう。観光活動の構成から見ると、自主的観光と実習主目的型観光が類似パターンを有する。最も多い割合は、見学・鑑賞であり、ほぼ6割を占める。しかし、帰省型観光において、見学・鑑賞が38.2%しか占めない。対照的に、帰省型観光では、体験が19.4%の高い割合である一方、移動が6.1%の低い割合を有する。このような構成から、大学生が帰省期間中には、実家を中心とする近距離範囲で観光活動を行う傾向を示すことが認められる。

さらに、26の具体的な項目における件数と構成を分析するのが、第1表である。自主的観光と帰省型観光、実習主目的型観光のいずれにおいても、見学・鑑賞が活動内容の38%以上の割合を占め、最も重要な内容になる。特に、自主的観光も実習主目的型観光も、59%以上の割合を占める。しかし、具体的な項目も考察すると、内容には大きな違いが存在する。自主的観光と実習主目的型観光において、「自然の風景を見る」がそれぞれ9.3%と11.0%であり、最も高い割合を占める一方、帰省型観光は、「都会見物」が7.7%の最大値をもち、都市型観光を中心とする傾向を示す。体験の活動内容に関しては、自主的観光も帰省型観光も「飲食」が最大値をもつことで一致する。実習主目的型観光は「写生・写真と動・植物採集などの趣味・研究」が最も高い割合を占め、大学

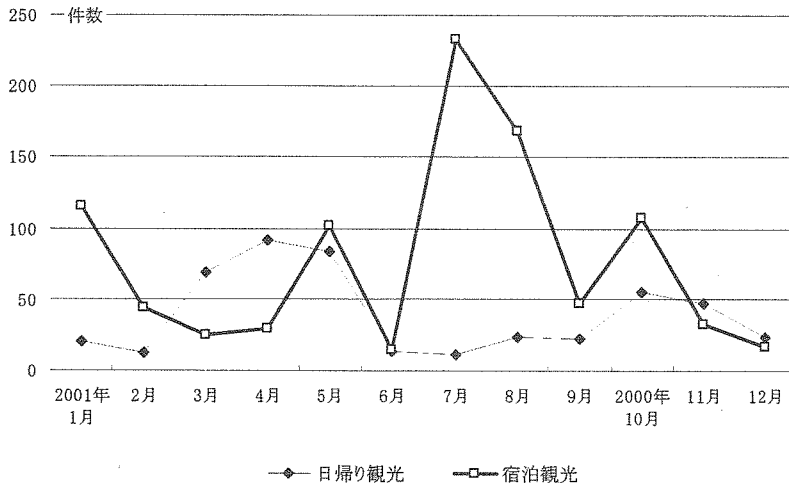
生が学習・研究を優先していることを示している。全体を考察すれば、現在中国の大学生の観光行動においては、見物と体験など比較的に安価な活動内容が多い傾向が認められる。特に、特別な機材が必要なために費用のかさむキャンプ、ドライブなどの項目、加えて自然環境にも制限されているヨット・モータボート・ダイビング・サーフィン、スキーなどの種目はきわめて少ない。このような観光目的と観光活動内容の特性は、観光圏を形成する目的地の選択にも大きく影響与えると予想できる。

3. 観光時期から見た観光圏

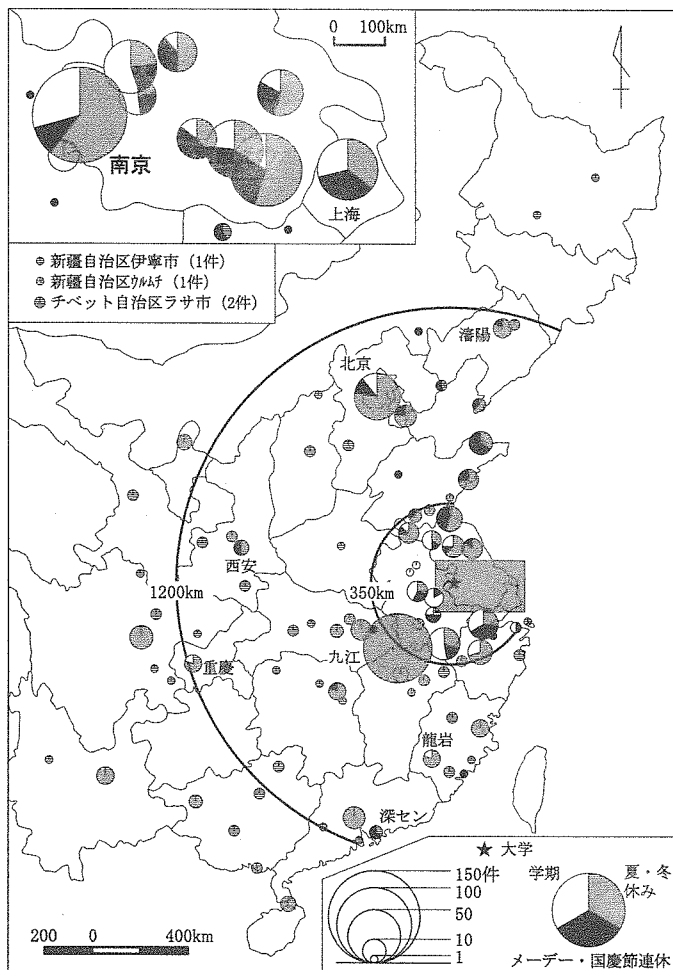
本章では、大学生の観光行動の時間的特徴を分析し、時間的特徴と空間的な構造との関係を考察することにより、観光時期による観光圏の形成を解明する。

調査期間の2000年10月から2001年9月までの1年間を月ごとに集計した結果を、第4図にまとめた。日帰り観光と宿泊観光の合計件数から、夏休みの7月、8月がそれぞれ244、193件であり、最も頻発に観光行動が行われている。ついで、合計で150件を超えたのは、10月の162件と5月の186件である(第4図)。

最も意味深い現象は、日帰り観光と宿泊観光の関係である。日帰り観光の件数が宿泊観光より多い3、4、11、12月は、すべて学期期間中の月である。その他の月においては、すべて宿泊観光の件数が日帰り観光を上回っている。中でも、7、8月の夏休みと1、2月の冬休みにおいて、双方の件数の差が最も大きい。ついで、5、9、10月も宿泊観光の件数が日帰り観光より多い。現在、中国の国が定める休日は年間10日となっている。近年、国内の消費および需要を拡大させるため、春節(旧正月、1月下旬又は2月上旬の3日間)、そして天候の良好なメーデー(5月1日～3日)および国慶節(建国記念日、10月1日～3日)について、前後の土・日曜日とその間の2日を休日として、連続1週間の休暇が取れるようにしている(劉、2001)。いわゆる、大学生の年間生活には、夏・冬休みの1、2、7、8月の長期間休暇、メーデー・国慶節連休の5、9、10月の1



第4図 月別観光件数の変化 (アンケート調査より作成)



第5図 宿泊観光の時期別分布 (2000~01年) (アンケート調査により作成)

週間連休、そして学期期間中週末だけの長さが異なる休暇が存在する。上述のように、宿泊観光と日帰り観光の件数の差も、休暇期間の長短に比例する。換言すると、大学生の観光行動は、休暇に大きく影響されていると言えよう。

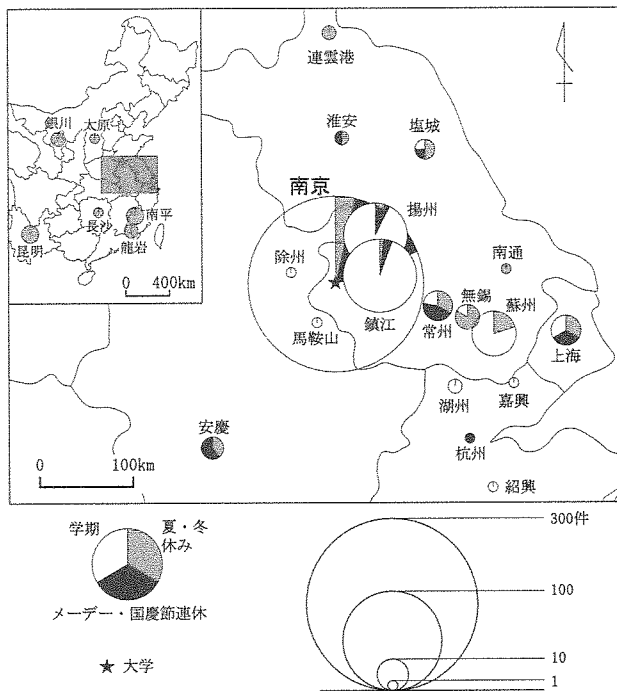
このような休暇の長短は、件数だけでなく、距離の摩擦効果も考慮に入れば、宿泊地の分布、さらに観光圏の形成にも影響を与えると予想できる。この仮説を第5図で示す宿泊観光の時期別宿泊地の空間分布により検証する。1年間を夏・冬休み(旧正月連休を含む)とメーデー・国慶節の連休、学期の3つの期間に分けて宿泊観光の件数を検討したところ、937件のうち、夏・冬休みを利用したのが561件、約6割を占める。残り4割のうち、メーデー・国慶節の連休が182件、学期内が194件、それぞれ約2割を占める。

観光時期による観光圏の形成では、次のような特徴が見られる。まず、学期内の観光は、北は北京、西は重慶、南は福建省の龍岩まで分布している。しかし、北京を飛び地に相当するものと捉え、

また重慶と龍岩を例外的な事例とした場合、学期内の観光が、南京から350km圏以内の江蘇省およびそれに隣接する安徽省と浙江省、上海の4地域に集中していると考えられる。メーデー・国慶節の連休に行った観光について、目的地は南京から1200kmの圏域に拡大する。最北が瀋陽、最南は深圳、西は西安までの連休観光圏が形成されている。この観光圏において、夏・冬休みの時期での観光件数も多く、さらに目的地の数も数多く分布している。1200km以遠の地域は、夏・冬休みを利用する観光しか存在しない。

上述のような観光圏の形成は、各観光目的地の件数からも認められる。350km以内の圏域において、宿泊地が33都市に分布し、観光件数の平均値は20件の高い値をもつ。10件以上の観光件数をもつ16都市のうち、北京と九江を除外すれば、すべての都市がこの圏域に位置する。観光件数の高密度と空間分布の多核化が最も著しい特徴である。350~1200kmの圏域には、49都市が含まれているものの、観光件数の平均値は5件に大幅に減少する。九江の79件と北京の36件を除くと、すべての都市が9件以下の低い件数にとどまる。件数に大きな格差が見られるとともに、少数の観光地に集中していることがこの圏域の特徴である。1200km以遠の圏域では、都市数が19に減るとともに、観光件数の平均値も2件まで降下する。目的地の分散化と観光件数の均等化が特徴になる。

続いて、日帰り観光の時期別空間分布も考察する。第4図が示すように、日帰り観光のうち、学期の3、4、5月の件数が最も多い。第6図で示すようにその空間分布を考察すると、南京から上海の間に立地する都市での観光行動は、学期または連休に行われる場合が多い。対照的に、南京の日帰り圏以遠の目的地、例えば太原、銀川を目的地とする観光行動がすべて夏・冬休みに行った日帰り観光であるため、それは大学生が



第6図 日帰り観光の時期別分布 (2000~01年)
(アンケート調査により作成)

夏休みあるいは冬休みに帰省した際に、実家を拠点として行った日帰り観光と考えられる。いわゆる日帰り観光は、大学を拠点とする観光圏と、実家を拠点とする2つの観光圏があると考えられる。大学を拠点とする日帰り観光圏では、同一の居住地を発地と着地とするため、南京から上海まで線状な圏域が、明瞭に形成されている。他方、実家を拠点とする日帰り観光では、拠点となる発地と着地が回答者によって分散しているため、明確な圏域がみられず、点在するパターンしか認められない。大学を拠点とする日帰り観光に関しては、学期期間中に行われた観光が大きな割合を占める。その空間分布を見ると、大学からの距離摩擦効果により南京に一極集中する構造が顕著である。しかし、宿泊観光のような休暇の長短による観光圏の差は認められない。大学からの直線距離は、最も遠い紹興までがおおよそ300kmで、宿泊観光の350kmより小さい圏域に分布している。学期期間中と連休を合わせた分布からみると、上海までほぼ直線距離290km（鉄道距離305km）以

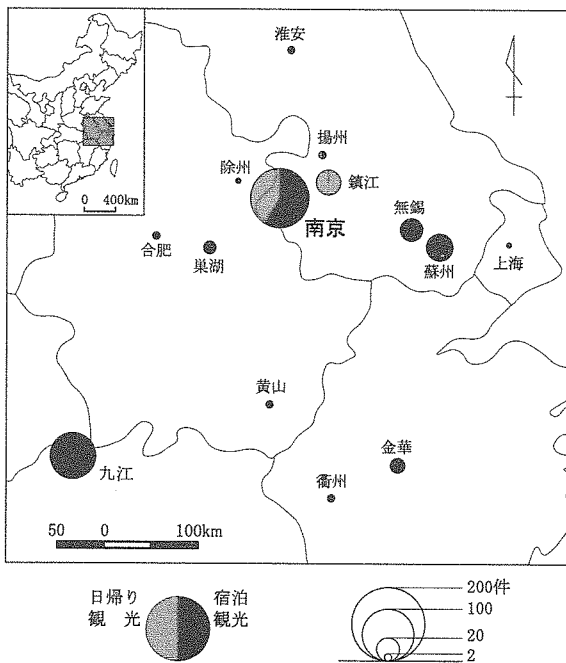
内に分布している。その空間分布は、同心円状の形態というよりも、南京から上海までの線状の形態が顕著である。この線状の地域では、交通の利便性の良い鉄道と高速道路を利用することが可能であり、時間の制限が厳しい日帰り観光には、交通の利便性が大きな要因として考えられる。

4. 目的別観光行動の空間構造

本章では、第2章で区分された3つの観光類型の空間的分布を考察したうえで、観光圏の空間構造を分析する。

まず、304件の実習主目的型観光を考察するのが、第7図である。観光目的地が、比較的に集中する分布パターンを呈する。14の観光目的地があり、合計304件の観光行動が見られる。そのうち、南京と九江がそれぞれ130件と79件と、両者の合計は総件数の68.8%を占めている。南京から水路（長江）で464km離れている九江市は江西省の北部に位置し、著名な廬山国立公園を有する。廬山は、「奇秀にして天下に冠たり」といわれ、長さ約29km、幅16kmの連山である。

山の周囲は壮絶な断崖絶壁で、多くの滝もあり、珍しい自然景観は格別の美しさを誇り、歴史的にも地形・植生・土壌などにおいても変化に富む自然環境であるため、李白と杜甫が愛した地としても有名で、書道・山水画にも多くの作品が残っている。南京大学地理学専攻の自然地理野外実習は、毎年ここで行われる。次いでは、南京から上海までの滬寧線（上海と南京を結ぶ鉄道）に立地する蘇州（27件）と鎮江（23件）、無錫（19件）となっている。南京から最も遠い九江までの圏域が、第5図で示す学期期間中の350km観光圏とほぼ一致する。これは大学生の観光行動の重要な特徴と考えられる。換言すれば、学習の一環として位置付けられる実習主目的型観光は、学期期間中に移動できる空間圏域で行われている。ただし、日帰りの実習



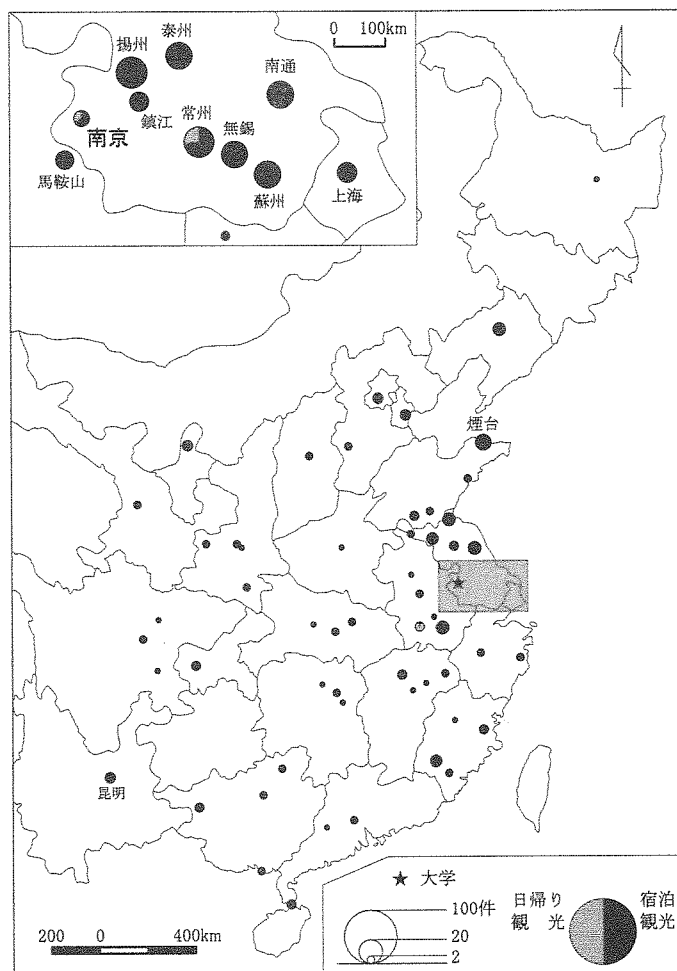
第7図 実習主目的型観光の分布（2000～01年）
（アンケート調査により作成）

主目的型観光は、南京そして南京から70kmの圏内に立地する鎮江と揚州のみに分布する。

ついで、第8図で示すように大学生の帰省型観光を分析する。66の観光目的地が選ばれ、合計361件の観光行動が見られる。その空間分布は、回答者の実家所在地の分布（第1図）とほぼ一致する。しかし、観光件数が10件以上の観光目的地は揚州（34件）と常州（33件）、蘇州（26件）、南通（26件）、泰州（25件）、無錫（25件）、上海（14件）、鎮江（13件）、馬鞍山（12件）の9つがあり、すべて南京周辺に立地する。次いで南京（9件）と煙台（9件）を除けば、残りの都市の観光件数がすべて6件以下である。特に、2件以

下の都市が36もあり、66目的地の半数を超える高い割合を示す。その間には、3～8件の19都市が存在する。したがって、件数から見た場合、南京から3段階の空間構造がみられ、各空間のなかに観光目的地が分散的に分布する。すなわち、帰省観光の観光圏は、大学を中心とする近隣都市で構成された高い頻度の圏域と、それ以遠の低い頻度の圏域に分かれている。

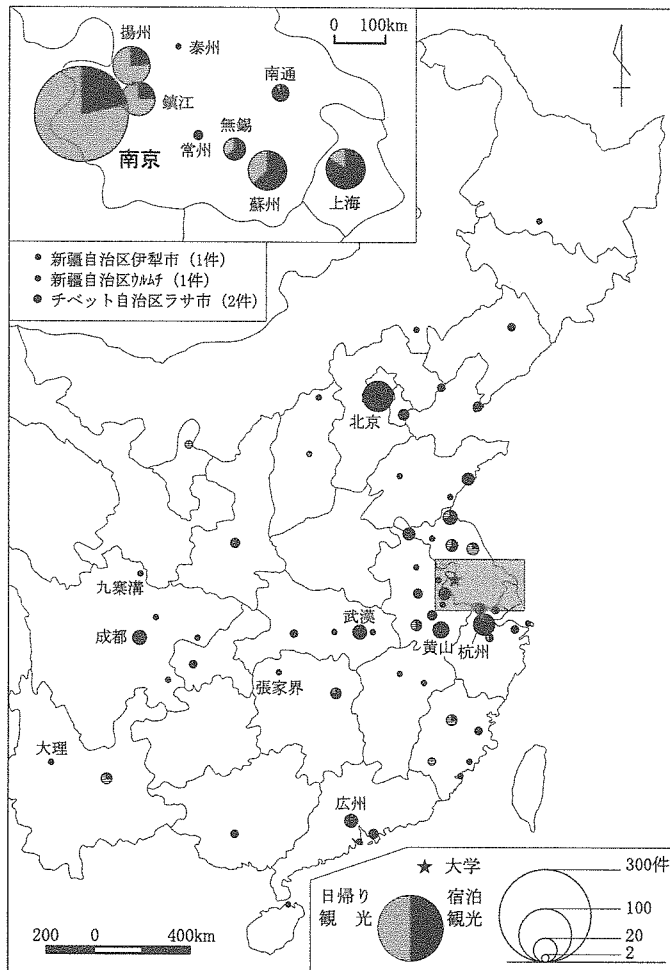
第三に、第9図で自主的観光を考察する。747件のうち、南京が316件で42.3%と高い割合を占める。この件数は、第2位の上海（56件）の約6倍にも相当し、「一極集中」の空間構造と捉えることができる。また、南京周辺に選択件数の多い



第8図 帰省型観光の分布（2000～01年）
（アンケート調査により作成）

都市が集中している点が、他の類型と類似している。しかし、南京から遠く立地する都市の中にも、観光件数が多い主要な目的地都市が見られる。例えば、地方中心機能を越えた国家的な中心機能をもつ首都北京（32件）が典型的な事例として挙げられる。ほかには、杭州（16件）と武漢（7件）、成都（7件）、広州（6件）などを指摘することができるが、これらはいずれも省都（省政府所在地、日本の県庁所在都市に相当するもの）であり、政治・社会・経済的な中心地において観光行動とともに買物行動や行政上の諸手続きを行っており、地域において重要な中心機能を果たしている。観光が多目的な余暇行動の一部となってい

る。逆に、南京の近隣に立地する泰州（1件）、常州（3件）、蕪湖（1件）などの都市への観光行動は数少なく、観光目的地としてその都市の地域における中心機能が低下していることが分かった。したがって、自主的観光に関しては、南京の「一極集中」とその遠方にある多核心的な分布が空間構造の特徴である。ここで、主要目的地別に特徴を考察すると、上海は人口規模において中国最大の都市でありながら近代化が最も進んでいるため、都市内見物や買物などの都市型観光が可能となる。蘇州は中国伝統庭園で有名な世界遺産であり、北京は数多くの名勝と世界遺産を有する。しかし、宿泊地の全体的な分布から見ると、これ



第9図 自主的観光の分布 (2000～01年)
(アンケート調査により作成)

らの主要な観光地のみならず、大学生は交通の利便性が劣る遠距離の観光地にも訪れている。これらの観光地は、いずれも交通の利便性は劣るものの、優れた観光資源を有する。例えば、雲南省の大理・麗江には麗江古城、湖南省の張家界には武陵原、四川省の九寨溝には九寨溝溪谷、チベットのラサにはポタラ宮など、世界自然・文化遺産が分布している。新疆のウルムチと伊寧は、自然景観が優れる上に、少数民族の民俗文化も体験できる観光地である。大学生の観光行動においては、このような文化価値を重視する一側面も見られる。

一方、目的地における観光目的の構成を考察して見ると、都市の属性を認識することもできる。まず、南京近隣に立地する都市は、南京との近接性が良いため、帰省、実習、自主的観光など多目的に利用されており、観光目的の構成からも同じような多目的性が反映される。この特性は、大学生が南京を拠点とする観光圏の確定にも根拠になりうると考えられる。たとえば、3類型の観光にも多くの件数をもつ都市は、北は山東省の青島から、南は安徽省の黄山までの範囲以内に多く分布している。特に、上海、蘇州、無錫、鎮江、揚州、黄山などの都市は、すべての観光目的を有している。

ここで、大学生の観光行動の空間構造を把握するため、南京からの直線距離で類型別に集計した観光件数を第10図で示し、両者の相互関係を探る。件数の分布をみると、南京を中心として、実習主目的型観光、帰省型観光、自主的観光の順に観光圏域が拡大していく。各類型の南京からの最遠距離をみると、実習主目的型観光が366km、帰省型観光が1868km、自主的観光が3421kmである。ただし、自主的観光において、最遠距離の3件で件数が極めて少ないうえ、他の分布との距離の差が著しいため、例外的な事例として考えられる。このような特殊事例を除けば、自主的観光も1900km圏に集中的に分布する傾向が認められる。自主的観光圏が帰省型観光圏とも重層していると言えよう。

さらに、各類型の近似曲線を考察すると、それぞれの空間特性が分かる。実習主目的型観光は南

京周辺に高密度な分布を示す。自主的観光は、目的地が南京周辺に高密度に分布しているのみならず、件数も最大であり、さらに加えて最遠距離も最大となっているため大学生に対して最も重要な観光活動となる。帰省型観光は、南京周辺の集中度が低く、目的地が全国に分散している。

5. 結論：大学生による観光行動の空間構造

以上の分析により、観光行動の主目的、目的地、さらに観光行動の内容に着目した場合、観光行動は自主的観光、帰省型観光と実習主目的型観光の3類型に区分することができる。大学生の観光行動の空間構造を第11図で表すように、その特徴は以下のようにまとめられる。

まず、観光時期と大学からの距離が、大学生の観光行動に大きな影響を与える要因となっている。観光時期について、休暇の長短によって学期期間中、連休（メーデー連休と国慶節連休）と夏・冬休みの3つが挙げられる。時期に加えて距離を考慮すると、学期期間中には350km、連休には1200km、さらに夏・冬休みには1200km以上の圏域と3つの観光圏が形成されている。

ついで、上記の観光圏と観光目的との対応関係を分析したところ、以下の特徴を確認することができた。まず、学期期間中の観光行動が集中的に分布する350km圏域は、実習主目的型観光の圏域と一致とともに、大学からの日帰り観光もこの圏域に限られている。この圏域において、多種多様な観光目的地が存在している点が重要な特徴である。例えば、上海のような都市型観光地として存在する大都市のほか、揚州、蘇州、杭州のような自然・人文名勝地も多数存在する。加えて、大学生の実家所在地も多いため、観光の多目的性と多様性、高密度な観光圏を成す。

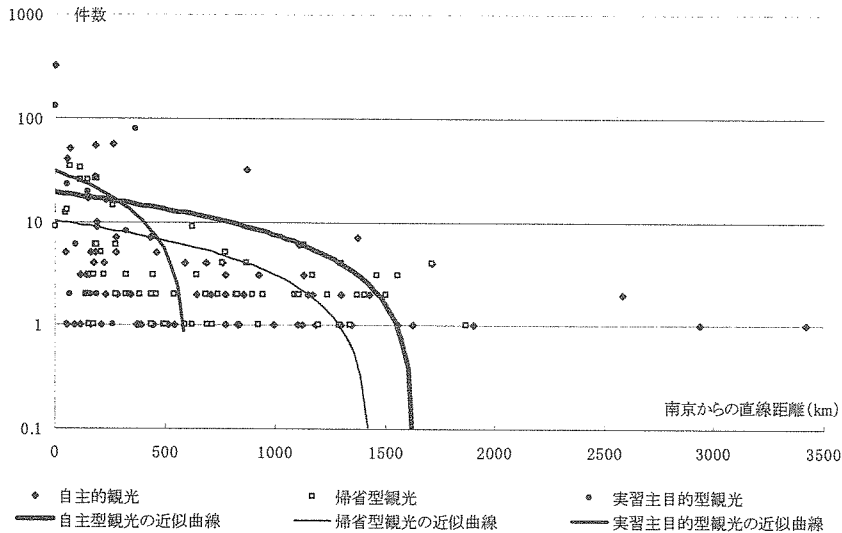
第三に、メーデー連休と国慶節連休で行われた観光行動は、短期間の宿泊観光が多い。観光目的を見ると、大都市あるいは名勝地への自主的観光が主流となる。なかには、連休を利用する帰省行動もあるため、それと伴う実家を拠点とする観光行動も存在する。

第四に、1200km以上の圏域では、夏・冬休み

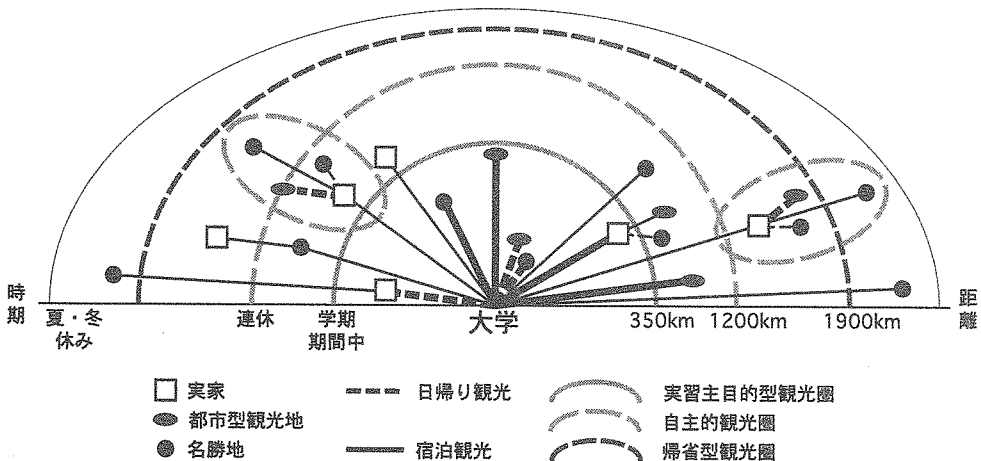
に行われた観光行動が多く存在する。特に、1900kmまでの圏域は、帰省型観光と自主的観光が重なるため、観光件数が多いのが特徴である。そして、大学から遠く離れている観光価値の高い名勝地と大都市も、この圏域に数多く存在し、多核心構造を呈する。具体的に言えば、首都の北京とともに、各省の省都が良い事例になる。

最後に、大学生の自主的観光圏は、主に大学を

中心とする1200km圏域である。しかし、夏・冬休みの帰省期間中に、実家を拠点とする自主的観光も行われ、さらに観光圏を1900kmの帰省型観光圏に遠く広げていく。これらの観光は、件数が少ないが、大学生の自主的観光において、大学と実家の2つの拠点に依存することを呈している。このような特徴は大学生の観光行動において、無視できない存在である。



第10図 類型別観光件数と距離との関係 (2000～01年)
(アンケート調査により作成)



第11図 大学生による観光行動の空間構造モデル

[参考文献]

- Burnett, P. (1976): Toward dynamic models of traveler behavior and point patterns of traveler origins. *Economic Geography*, 52, pp. 30-47.
- 小池洋一 (1960): 都市住民のレクリエーション形態とその地域的關係. 地理学評論, 33, pp. 615-625.
- 李 山・蔣 軼紅・呉 兵・楊 曉曦 (2001): 中国城市居民旅游感応空間研究. 旅游学刊, 16 (1), pp. 22-26.
- 劉 明 (2001): 中日観光交流の新展開 — 中国人訪日観光の現況と規制緩和について —. 日本観光研究学会第16回全国大会論文集, pp. 165-168.
- 蒙 睿 (2001): 我国青少年旅游網絡建構的初步探討. 旅游学刊, 16 (1), pp. 47-50.
- Louviere, J. J. (1981): A conceptual and analytical framework for understanding spatial and travel choice. *Economic Geography*, 57, pp. 304-314.
- 米 紅・鮑 静 (2001): 中国城市「一日游」分析モデル構築及其実証研究. 旅游学刊, 16 (5), pp. 75-77.
- 落合康弘 (1987): 静岡県中部地区における週末型余暇活動の地域的展開. 地理誌叢, 29 (1), pp. 31-42.
- 落合康弘 (1991): 神奈川県中西部における余暇活動の空間的展開. 経済地理学年報, 37, pp. 245-265.
- 落合康弘 (1993): 東京都区部地域における住民の週末余暇活動パターン. 地理誌叢, 34 (2), pp. 32-47.
- 落合康弘 (1999): 首都圏に居住する大学生の非日常的な外出レジャー行動の空間パターン. 日本大学文学部自然科学研究所研究紀要, 34, pp. 61-72.
- 高橋伸夫編 (1990): 日本の生活空間. 古今書院, 260p.
- 高橋伸夫・高林清和 (1978): 浜松市における余暇圏の構造. 人文地理学研究, 2, pp. 95-108.
- 湯 槿・潘 丹 (2001): 統計数字からみる中国の観光事業の一側面. 立教観光学研究紀要, 4, pp. 87-92.
- 若生広子・高橋伸夫・松井圭介 (2001): ライフステージからみた女性の観光行動における空間的特性 — 仙台市北部住宅地の居住女性を事例として —. 新地理, 49 (3), pp. 12-33.
- 呉 必虎・唐 俊雅・黄 安民・趙 榮・邱 扶東・方 芳 (1997): 中国城市居民旅游目的地選択行為研究. 地理学報, 52 (2), pp. 97-103.
- 張 捷・都 金康・周 寅康・張 思彦・蔣 兆剛 (1999a): 観光旅游地客流時間分布特性的比較研究 — 以九塞溝、黄山及福建永安桃源洞鱗隱石林国家風景名勝区為例 —. 地理科学, 19 (1), pp. 49-54.
- 張 捷・都 金康・周 寅康・張 思彦・潘 氷 (1999b): 自然観光旅游地客源市場的空間結構研究 — 以九塞溝比較風景区為例 —. 地理学報, 54 (4), pp. 357-364.